

趣向を換える観光名所

マスジド(モスク)に戻ったアヤソフィアの変遷が意味すること

信州イスラーム世界勉強会代表 板垣 雄三

地中海から細長いダルダネルス海峡・マルマラ海・ボスポラス海峡を通過して黒海に入る
その抜け口手前、幅わずか1kmのボスポラス海峡をはさんでアジアとヨーロッパが向かい合う
アジア側の街ユスキュダル(スクタリ)を望むヨーロッパ側傾斜地に広がる都市イスタンブル
この東・西の接点で人類の文明的出会いとその所産のパノラマがかもしだす比類なき風格



〔アヤソフィア礼拝堂・博物館〕

トルコ観光をした人は、トルコ(首都はアンカラ、しかし)最大都市イスタンブル(昔はコンスタンティノープルとも呼ばれた)で、きっと訪れたはずのアヤソフィアの印象は鮮明なはず。トルコ旅行はまだ、という人もそのイメージは思い浮かぶのではないか。これまでは博物館だったアヤソフィアが最近マスジド(イスラームの礼拝堂、最近は「モスク」というヨーロッパなまりの語は昔ほど使われなくなった)に戻った。広くイスラーム世界のマスジドの中で、アヤソフィアはその風格も歴史も断然 別格だ。

NATIONAL GEOGRAPHIC の「ギャラリー:イスラムが生んだ美しく壮麗なモスク写真 17 点」がネット上で眺められるので、見比べてみよう。アヤソフィア全景や 86 年ぶりの礼拝も登場。

<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/gallery/081900974/>

「イスラムが生んだ美しく壮麗な…」というが、アヤソフィアの場合は簡単にそうとばかりは言えない。イスラーム文明は古代のオリエント世界そしてギリシア・ローマの遺産を受け継ぐものであり、アヤソフィアはまさしくそのような歴史伝統が産み出したものだからだ。

アヤソフィアの歴史的起源

西暦4世紀半ば ローマ帝国を再建するコンスタンティヌス大帝がギリシア人植民市ビザンチウムに建設した「新ローマ」コンスタンティノポリスで、皇帝権力のもと公認され公会議で正統的教義の整備がはじまったキリスト教のメガレ・エクレシア(大聖堂)が創建された。それは「ハギア・ソフィア」(ギリシア語で「聖なる英知」という名で呼ばれ、ヘレニズム世界の共通語(コイナー・ギリシア語)では「アギア・ソフィア」と発音された。これが後にトルコ語の呼称「アヤソフィア」の語源となる。ついでに言えば、元クスタンティニーエことイスタンブルも語源はギリシア語とみられる。

537年末 それまで、キリスト教の教義をめぐる皇帝が公会議を召集するたび新たに排除され呪詛(じゅそ)される異端分子が指定され、「正統派」vs.「異端」の対立抗争から、またそれが絡む政争・党争が呼びさます市民反乱の都市破壊から、聖堂が焼失・損壊することが起きていた(404年、532年)が、この年、東ローマ皇帝ユスティニアヌスの命令による大規模な新教会堂建設がやっと完成(巨大な丸屋根[ドーム]は難工事だった)、献堂式が行なわれ、東ローマ帝国と東方正教会総大主教座との権威を表す大聖堂が出現する。これがアヤソフィアの基本構造の起点である。三位一体説(父なる神・子イエスキリスト・聖霊は同質で一つの神の三つの顔だとする立場)を正統化することに反対して異端とされたアジアの東方諸教会のキリスト教徒たちから見ると、それは自分たちを圧迫・征圧する東ローマ(ビザンツ)帝国の権力の象徴と見えただろう。しかしともあれ、現在のアヤソフィアの原構造はここでできた。まもなく7世紀初めに登場してくるイスラームは、イエスを預言者の一人それゆえ人間と考え、東方諸教会のキリスト教徒たちと共通・協同の三位一体説反対の立場を分かち合うので、彼らをビザンツ帝国の圧迫から解放する役割を演じることになる。キリスト教成立の地も、ユダヤ教学タルムードの源郷も、こうしてイスラーム世界の中に収まり、そこはアブラハムの信仰に出发点を持つ三宗教に加えてゾロアスター教、サービア教、仏教などまで含む多様な諸宗教が共生する場となるのである。アギア・ソフィアを擁するビザンツ(東ローマ)帝国は、そんなイスラーム世界と直接に対峙する国家となった。

726~843年 ローマ・カトリック教会から見れば東方教会のギリシア正教(オーソドックス)だが、それはカトリック教会とともに「正統派」を自称するヨーロッパのキリスト教である。これら両者が、「異端」と決めつけたアジアやアフリカの東方諸教会(アリウス派、ネストリウス派、キリスト単性論諸派[シリア正教・エジプトやエチオピアの]コプト教会・アルメニア正教)などやそれらを支援し保護して古代ギリシア文明の継承者となりつつあるイスラームから、合理的な思考／神に対して個々人の主体的な生き方／を突き付けられてタジタジとなる情景が展開した。ビザンツ帝国を吹き荒れたイコノクラスム(聖画像[イコン]破壊運動)だ。それは726年レオン3世が一連の聖画像破壊令を発布して開始される。軍隊が出動してアギア・ソフィア大聖堂からすべての宗教的絵画・彫像が取り除かれた。787~815年の中断期間を除き、人工のイメージ(像)を創作し崇敬するという創造主への敬虔さの欠如を戒め、偶像崇拜の禁止の徹底をめぐる論争の渦と実行の嵐とは、イスラーム文明の登場という宗教改革がもたらした(近代性)のインパクトに対してどう適応するか苦悶するヨーロッパ・キリスト教の模索の姿だった。イコノクラスム中断の立役者コンスタンティノポリス(東ローマ帝国)の皇后⇒女帝[バシリッサ]エイレーネの動き(イコン崇拜を復活させる第2回ニカイア公会議を召集した787年から802年失脚まで)は、西欧でのローマ・カトリック教会(正教会主導の第2回ニカイア公会議に協力)や[800年教皇レオ3世により戴冠されて]西ローマ皇帝となるフランク王国のシャルルマーニュ(カール大帝)の動きと繋がりが合うもので、これまたイスラーム世界からの

衝迫への受け身の対応なのであった。こうしてアギア・ソフィアの聖堂は、世界全体の変転に応じて、その装置や面貌を目まぐるしく入れ換え、付け変えたのだった。

ついでながら、アギア・ソフィア礼拝堂は、自然災害や人災、また複雑な構造ゆえの剪断応力(せん断おうりょく)や経年劣化の蓄積に直面しつづけた。550年代は頻発する地震(ことに553, 557, 558年の激震)に見舞われ、中央・半・小ドーム各所で崩落が起きたという。857年の火災、869年の地震、さらに989年と1346年の大地震による被害の記録も特筆されている。しかし、ドーム崩落やドームを支えるアーチ群やリブなどの破壊損傷、内壁の破損など、重大な被害も、長くても数年で修復・補強などの工事が完了したようである。

アヤソフィアの歴史的変遷・変貌

1202~61年 第4回十字軍とラテン帝国 ギリシア正教会とローマ・カトリック教会(東西教会)の分裂・対立は、聖画像崇敬やローマ教皇首位権や聖職者の妻帯などをめぐり深まっていたが、何より「聖霊(ハギオ・ Pneuma: [正教会の用語は]聖神)は父[なる神]から発する」という共通の信条に、カトリック教会は「[ラテン語で]フィリオクエ: 子(イエス)からもまた」を付加する三位一体論の理解をめぐる「filioque 論争」が決定的な争点となった、と言われる。日本の高校生は「世界史」で、ローマからコンスタンティノポリスを訪れた教皇使節が正教会への破門状をアギア・ソフィア聖堂の至聖所祭壇に叩きつけ正教会総主教が逆の破門状を投げ返した1054年の事件を、「正統派」内部の大分裂(大シスマ)と習うが、それは累積していく対立の一齣にすぎない。文字通りの決裂は、1202~04年の第4回十字軍から起きた。「聖地回復」を旗印としてイスラーム世界にしかける侵略戦争だった十字軍のはずが、その回はフランス諸侯とヴェネツィアとが組み、エルサレムに向かうのではなく何とコンスタンティノポリスを征服、ビザンツ帝国を滅ぼし、ヴェネツィアの射利ばかりが目立つ支離滅裂のラテン帝国を出現させた。アギア・ソフィア大聖堂は、虐殺とレイプと略奪の修羅場と化し、ついでカトリックの大聖堂へと一変させられた。亡命貴族が樹立したニカリア帝国が61年コンスタンティノポリスを奪回しビザンツ帝国を再建するまで、その状態は続いた。

第4回十字軍を描いた細密画、ヴェネツィアの旗、ラテン帝国紋章、神聖ローマ帝国紋章、フランス諸侯の紋章の一部、など、以下の URL からネット上で参看できる。

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%AC4%E5%9B%9E%E5%8D%81%E5%AD%97%E8%BB%8D#/media/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Conquest_of_Constantinople_by_the_Crusaders_in_1204.jpg

1453~1935年 オスマン国家からトルコ共和国へ いよいよこの地域がイスラーム化されるばかりか、アギア・ソフィアがイスラームの礼拝堂になる時代となる。ここで主役となる人々すなわちユーラシアのチュルク系遊牧民集団の動きが西アジアで顕著になりだすのは、バグダードや長安の栄華が傾いた11~12世紀からで、セルジューク朝国家の登場は西欧からの十字軍を呼びさまし、それは東から征西するモンゴル帝国の形成にも繋がり、そこからビザンツのキリスト教正教を受容するスラヴ諸族の国家形成に繋がっていく。ルーム(=ローマ)・セルジューク朝(1077~1308)はアナトリアのチュルク化・イスラーム化を拓けていたが、13世紀末以降アナトリア西北部に拠るチュルク集団の一つ、オスマン軍団が、ラテン帝国壊滅後の再興ビザンツ帝国

の内紛・弱体化に乗じ、アナトリアとバルカンとで勢力を伸ばした。14世紀末にはブルガリアやセルビアを従属させ、アテネ公国にまで遠征する。ビザンツ帝国はオスマン国家を利用しようとして、逆に臣従を迫られる結果となった。だが、オスマン国家の進路も平坦ではない。1402年長駆アナトリアまで攻めてきたチュルク・モンゴル系ムスリムのティムール軍にアンカラの戦いで大敗したからだ。これで形成途上のオスマン帝国は振り出しに戻るが、15世紀前半を通じて営々とアナトリア・バルカンでの領域を回復、1453年[アンカラの戦いで捕虜となったバヤジト1世の曾孫[ひまこ、4代目]]メフメト2世の10万を超える兵力により、コンスタンティノポリスは占領され、東ローマ(ビザンツ)帝国の消滅が達成された。それは命脈尽きていたものの終焉だった。だが、オスマン国家にとっての1453年は、アジア・ヨーロッパ・アフリカにまたがる帝国そして地中海海上帝国に向かっての転換点であり、16世紀前半のセリム1世・スレイマン1世の極盛期を開く出発点だったことは間違いない。こうして、荒廃していたアギア・ソフィア大聖堂は、イスラームのジャーミイ camii (金曜日昼の集団礼拝を行なう規模の大きなモスク)となって再生した。

この場合、キリスト教の教会堂がイスラームの金曜礼拝の会堂に変えられたのは、[スペインなどで逆のケースとして観られるように]単なる戦争の勝者=征服者の接収行為だったのか。イスラーム法では人類史上、創発的に、女性の権利保障・セクハラ禁止を厳密に規定したのと同様に、戦争法規でも、戦闘禁止の条件・捕虜の取扱い等とともに戦利品(動産ガニーマ、不動産ファイ)の分配に関する規定がある[クルアーン 3:161、4:94、8:1・41・69、48:15・19・20など]。メフメト2世はコンスタンティノポリス占領当日、兵士らに3日間ガニーマ取得を許可したが、多数がアギア・ソフィア聖堂に殺到し乱暴狼藉(破壊と奴隷狩り)を働いたのを見て深く後悔し、自由取得許可は1日のみで取り消し、モスク・ジャーミイへの変換と住民保護とを決定したと伝えられる。その措置はむしろ施設保護と社会的公正とを志向するものだった。このことが認められるのは、その後、十字架は片付けられアツラフ、ムハンマド、[預言者の孫たち]ハサンとフサインと記した文字円盤を設置、ミフラブ(マッカの方角を示す壁龕へきがん)やミンバル(説教壇)が設けられ、建物の外周に高いマナーラ(光塔、ミナレット)が新設・増設されていったが、無数の聖画像やモザイクはそのままか、注意深く漆喰で覆い隠されるかして、大事に保存されたからである。以下のネット上の写真ギャラリーは、トルコ語の説明付きだが、アヤソフィアで働かされた配慮を示す。

https://tr.wikipedia.org/wiki/Ayasofya#/media/Dosya:Hagia_Sophia_Mars_2013.jpg

スレイマン大帝はじめ、オスマン帝国のメフメト2世以降の歴代スルターンが、カエサリ・ルーム(ローマの帝王[東ローマ帝国の継承者])と自覚していたのは、これに関係するし、また庶民の生活意識が、オスマン帝国は諸ミット(宗教共同体)の複合からなること、つまり預言者ムハンマドはあまたの預言者たちの締め括り・封印で、イスラームは同じく神が制定した他の諸宗教と兄弟姉妹関係にあるのだというイスラームの教えに感化されたものだったことに注目すべきだ。

この問題を考える際、シリアはダマスカス旧市街のウマイヤ・ジャーミイにも眼を向けることを勧めたい。それは、先史時代以来アラム人の雷雨の神ハダド祭祀の場、ついでローマ支配下でユピテル神殿、ついで391年キリスト教の大聖堂となり、661年アラブ・ムスリム軍がダマスカスを解放、聖堂の一角にイスラームの礼拝所(ムサッラ)ができるが、のちウマイヤ朝ハリーフア(カリフ)が706年教会堂の歴史的構造と遺物を活かしつつ大きく改造するプランの金曜礼拝モスク建設を計画するが、キリスト教徒側とは弁償金支払いで示談、工事は715年に完成。

洗礼者ヨハネの首を納めた箱と言われるものが発見されたが、モスクの柱の内側に丁寧に安置された。セルジュク朝やマムルーク朝による修復、十字軍がモスクで行なったミサ、モンゴル軍がモスクを投石器で要塞化しようとした物語などは、1516年、翌年マムルーク朝を滅亡させることになるセリム1世がダマスカスのこのジャーミイ・バニー・ウマイヤで礼拝を行ったとき、イスタンブールのアヤソフィア連想と結び合って彼の脳裡を駆けめぐったことだろう。

オスマン帝国は、16～17世紀、ヨーロッパの宗教改革・宗教戦争・国民国家形成に対して、国際法・外交システム・社会契約論・寛容思想などの面で、断然、先輩格メンター（教師）の役割を演じたが、18世紀以降、ヨーロッパ国際政治の「東方問題」干渉の対象とされ、政治経済的・軍事的な従属下におかれるようになる。帝国の風格は主権国家群の「力（パワー）の政治」・「軍事化された産業資本主義」に負けた。アヤソフィアの補強・改装にもヨーロッパ人建築家・技術者の関与が目立つにいたった（ことに1847～49年の大修理）。アヤソフィアは、トプカプ宮殿や大バザール（カパルチャルシュ）などとともに、ヨーロッパ人の東洋趣味（オリエンタリズム）の旅の目的地となる。パリーコンスタンティノープルを結ぶオリエント急行の開業は1883年だ。線路はドイツのきな臭いバグダード鉄道建設に繋がり、旅行案内書もアガサの推理も戦争と無縁ではない。

皮肉なことに、多民族・多宗教を擁し多元的で普遍的な性格に彩られたオスマン国家のイスラーム的特質への自信は揺らいで、トルコ人意識と立憲主義とに基づくトルコ民族主義を強調する1908年青年トルコ人革命が起きてくる。第1次世界大戦でドイツ側に立って参戦し敗戦国となるが、連合国の圧迫に対し、ムスタファ・ケマル（アタチュルク）が指導するトルコ革命により、オスマン帝国に代わるトルコ共和国が1923年樹立された。それは、ハリーフア（カリフ）制とシャリーア（イスラーム法）とを廃止して政教分離の原則を確立し、アラビア文字表記をラテン文字に換える、世俗主義（ライクリク）の立場を採った。

1934年11月24日 ハギア・ソフィアを博物館に転換するアタチュルクの決定 「トルコ共和国の初代大統領ケマル・アタチュルクとその閣僚たちが署名した大統領決定は、ハギア・ソフィアをモスクから博物館へと変えた。この決定は、転換が〈全東洋を幸福にし〉、〈人類に新しい知の境域を贈る〉ものと論じる当時の教育省からの書簡を引用している。大統領決定が引用し、且つ依拠した博物館への転換を提案する教育省書簡は、同モスクが、オスマン国家歴代スルターンに利用されたにもかかわらず、ビザンツ帝国臣民の手に成る人工物であるという経緯のゆえに、宗教上の財産寄進に関係する地位を一切有しないということにも論及している。」

（SHARIASource at Harvard Law School 解説 <http://beta.shariasource.com/documents/3779>

これにより、アヤソフィアは隠されていた聖画像やモザイクが陽の目を見ることとなり、床の絨毯もはずされて、モスクとなる前の原状の雰囲気も回復され、蓄積されてきた文化財の豊かさや文明の重層の意味とが一層明らかとなった。

2020年7月10日 モスクとしてのハギア・ソフィアを回復させるエルドアン大統領令

「ハギア・ソフィアを博物館に転換するという1934年の閣議決定を無効にする行政裁判所の決定に従い、レジェップ・タイプ・エルドアン大統領は、同施設の管理運営を宗務局長官職のもとに移管し、礼拝に開かれたモスクとしての機能を回復させることを決定した。」

（SHARIASource at Harvard Law School 解説 <http://beta.shariasource.com/documents/3777>

この大統領令2729号は、イスタンブールのイスラーム系諸団体が2016年アヤソフィア博物

館のマスジド復帰を求めた提訴について最高裁(ダヌシュタイ)が2020年7月10日に下した決定に即応するもの。ハギア・ソフィアをマスジドから博物館に転換するとして1934年の閣議決定を無効とするダヌシュタイ第10法廷の全員一致の決定において、法廷の判断の要点は、次の通り。「トルコ共和国の民法典への付属法規は、新民法典の発効前に確立していたワクフ(寄進)財には旧法(イスラーム法)が適用されると定めていた。法廷は、ハギア・ソフィアが征服者スルターン・メフメトのワクフの一部をなすマスジドであったこと、また当時有効であった法のもとでは行政上の決定によるワクフ財産の地位の変更は禁じられていたことを、確認した。それゆえ法廷は1934年の閣議決定はワクフ財産の地位を不法に変えたものであると裁定し、それを取り消して、ハギア・ソフィアが礼拝のためのマスジドとしての地位を回復することに道をひらくものである。」これは、カーリエ博物館(正教修道院礼拝堂、11世紀建造)についての同様の決定と併せて行われた。決定正文と決定にいたる審理経過の原文とその英訳とは以下で読める。

<https://beta.shariasource.com/documents/3778> [交互に、トルコ語原文と英訳テキスト]

アヤソフィアが象徴するトルコの現在

建国理念はどのようにして逆転したか トルコ共和国では建国の父ケマル・アタチュルクの権威は絶対だった。博物館となった元マスジドでは、クルアーン朗誦も礼拝も厳禁だった。脱宗教の政治・世俗主義が国是だったのだから。それなのに、アヤソフィアがジャーミイに戻ってしまうなど、これほどの変化は一体どのようにして生まれてきたのか。

新生トルコは自立に励み、第2次世界大戦では中立に徹して1945年2月に対独・対日宣戦に踏み切った。しかし大戦後は、地理的条件から「冷戦」下の戦略環境で日本とも通じ合う対米関係や歴史問題に縛られていた[朝鮮戦争、NATO、バグダード条約、軍事基地、イスラエル承認国、キプロス紛争、過去とアイデンティティの重荷[アルメニア人ジェノサイド、クルド問題]、内政では多党制移行など]。ゲジェコンド(不法一夜建て小屋スラム)やドイツ出稼ぎガストアルバイター(「客人」労働者)の大波など、経済開発のひずみと都市・農村の格差の厳しい矛盾の現れだった。しかも、都市底辺や農村の龐大な人口の貧困層ほど、アタチュルク時代以来の世俗主義的近代化から切り捨てられ取り残された熱心なイスラーム信者たちだったのである。ソ連が解体してユーラシアのチュルク世界の眺望が一挙に展けると、米欧で教育を受け広い人脈ももつ軍や法曹や産業・金融界のエリートらは、宙ぶりの華麗な暮らしの中で、トルコが欧州共同体や欧州連合EUに加盟するのはいつか論じ合っている、そんな奇妙な情景も、他方に現出した。

サイード・ヌールスイが挙げた声

共和国を実現するトルコ革命段階からアタチュルクの路線に批判的で、信仰と科学とを両立させるイスラーム復興を説き、1910年代から半世紀にわたりこれをクルアーン解釈に託すメッセージ『Risale-i Nur リサーレ・ヌール(光の書簡)』として著述し続けたトルコ東部出身クルド人学者サイード・ヌールスイ(1877~1960)の存在が注目された。彼を師と仰ぎ慕う民衆の拡がりにはヌールジュ運動と呼ばれた。だが彼の生涯の活動は、旅路か牢獄か追放地かで「言葉のジハード」という非暴力の形をとり、政治的には体制内リベラルの民主党アドナン・メンデレス首相(1950~60年、軍部クーデタで死刑)を支持したりしていたのに、そして彼のコミュニズム非難は激烈だったのに、彼の言論はつねに「反体制的」とみなされ、危険視された。

1960年代末からヌールジュを継承・発展させたのが、フェトフッラー・ギュレン(1941~)指導下で教育・福祉・医療・マイクロ金融など多様な社会活動諸分野において市民のイスラーム運動を広範に、また国際的にも、組織・展開したジェマート(共同体)運動だった。これは、世俗主義の国家イデオロギーと事を構えるどころか、むしろそれとも協調・調和できるのだ、という穏健路線を強調するイスラーム社会運動として、以下に見る政治次元でのイスラーム主義勢力の台頭を可能にし支える社会基盤をつくりだしていたのである[後述の2016年クーデタでまた触れる]。

エルバカンが押し開けた門

政治にイスラーム主義を持ち込むリーダーとして注目されたのはネジメッティン・エルバカン(1926~2011)だ。彼は由緒あるオグズ名門の出で、[神秘主義]ナクシュバンディ教団の門徒だが、西独アーヘン工科大で機械工学の博士号を取り、帰国してイスタンブール工科大教授、1968年トルコ商工会議所会頭となるが、たちまち財界のボスたちと衝突、辞任に追い込まれ、政界に転じた。西洋かぶれ世俗主義[権力中枢の体制派と共に左翼も含まれる]と大資本の悪徳とを厳しく批判、イスラームの価値観・倫理の重視、利子生み(リバー、不労所得の増殖操作)禁止、イスラーム世界の連帯、をめざし、こうした政治思想の立場を「[神の摂理のもとにある]国民の展望(ミッリー・ギョリュシュ Millî Görüş)」と名付けた[同名の著書 1969]。1970年以降、[憲法の政教分離条項違反として、彼の活動に加えられる圧迫をかわすため]次々と新政党結成を繰り返す。①70年 国民秩序党MNP [Nizâm 秩序] ⇒②72年 国民救済党MSP [Selâmet 救済] ⇒③83年 福祉党RP [Refah福祉] ⇒④97年 美德党FP [Fazilet 美德] ⇒⑤2001年6月 至福党SP [Saadet 至福]、という具合だ。

②MSP段階では、[アタチュルクが創設した共和国中心政党で社会民主主義の]共和人民党CHP政権とも連立関係を結んで1974年その政府に入り、その後は[民主党の後身リベラル保守の]公正党APの与党となり、スレイマン・デミレル首相のもとで77年後半副首相を務めた。党勢の高まりとともに、アタチュルク廟での独立戦争勝利記念日不参加とか、イスラーム法施行要求デモとか、独自路線を社会的に明示すると、その途端80年9月、軍はクーデタを起こして、MSPを非合法化しエルバカンはじめ同党幹部を逮捕、さらに全政党の活動停止まで強制する。

3年後、民政移管とともに③RP段階がはじまる。しかし、福祉党は実質的な党首エルバカンをはじめ指導者たちは公職追放の身で政治活動が禁止されていたから、表向きの党首・指導部を立てて動かなければならない状態が87年まで続いた[それでもこの時期、私はリビアに出かけたとき、RPの活動が海を越えてリビアでも展開されていたのを目撃したことを憶えている]。87年以後のRPの国内での躍進はめざましく、95年の選挙でトルコ大国民議会の第1党の座を獲得した。96年6月[93年大統領となったデミレルから党首を受継ぎ初の女性首相も経験したタンス・チルレルの]正道党DYPと連立を組むRP政権(首相エルバカン、副首相チルレル)が成立する。ところが、軍主導の「宗教的反動勢力」中傷・圧迫が激しく、最高検察庁は憲法裁判所にRP非合法化を求める始末で、エルバカンは首相在任1年で辞職を余儀なくされ、RP政権崩壊、さらに98年初め憲法裁はRPを反国家的と認め、エルバカンはじめ党幹部の5年間政治活動禁止を裁定した。

エルバカンの政治拠点づくりの抵抗は持続するが、先を読み④FPIに速やかに移転した人々やそれを突き出る人々によって、指導者の世代交代が担われていくことになる。ただし、脆くも崩れ去ったとは言え、エルバカンがイスラーム主義政治の門をこじあけたのは確かである。

ギュルの流鏑馬(やぶさめ)技で射止めた大統領ポスト

アタチュルクが打ち固めた欧化型「近代化」の枠組のもとで、ヌールスイがイスラーム的生き方・考え方について民衆に自覚と自信とを与え、エルバカンが軍の暴力や国の制度の妨害をかいくぐり政治的柔軟性でイスラーム政党を議会に根付かせ短期でも首相となったとすれば、ギュルが目されるのは、イスラーム主義者に大統領への道を拓いたことだろう。

アブドゥラー・ギュル(1950~)は学生時代から詩人・劇作家ネジブ・ファズルの〈偉大な東洋〉観念に感銘する愛国的イスラーム主義者だった。イスタンブル・ロンドン・エクセター各大学に学んだ博士号をもつ経済学者[博士論文のテーマはトルコと他のムスリム諸国との経済協力]として1983~91年イスラーム開発銀行(IDB, ジェッタ)で勤務した後、帰国して91年から大国民議会でRP福祉党の議員、96~97年短命のエルバカン政権では重用され国務相(外交・経済協力担当)を務めた。軍の重圧下、新党FP美徳党の場で、彼はこれまでのイスラーム主義を反省し、世俗主義を護れと唱える国民にも積極的に理解と納得を訴えていくものとなる必要を説いていた。[9/11事件の3カ月前]2001年6月、憲法裁判所がこの美徳党FPをも非合法と判定、解散が命じられると、彼は同志で前イスタンブル市長のエルドアンと手を携えて、新たに公正発展党AKP[Adalet 公正, Kalkınma 発展]を組織し、もともとFPで党首にはギュルを推そうとしていた若手党員の機敏な対応力とエネルギーを結集した[古参の非妥協的守旧派は前記⑤の至福党に]。

2002年の選挙で、AKPはめざましい躍進ぶりで第1党の座を占め、しかもイスラーム政党の単独政権を実現させる[ヴェール着用問題で突っ張り止め、外交面で米欧と協調、政治スタイルの新鮮さ印象付け、等の効果]。ギュルは一步下がってエルドアンを党首にしていたが、エルドアンは被選挙権を剝奪された状態、そこでギュルが首相となるが、憲法改正で翌03年春、エルドアンは制約を解除され補欠選挙で議席を得、首相就任が可能となり、ギュルは外相になる。

2000年からトルコ大統領を務めていた[元裁判官、当然、世俗主義擁護の立場の]アフメト・ネジデト・セゼルの任期が終了する2007年春、議会での選挙方式によりAKPが大統領候補としてギュルを指名したが、イスラーム主義者が大統領となることへの反発が高まり、野党こぞってのボイコットが選挙プロセスを行き詰まりに追い込む。5月ギュルは立候補を辞退。だがその後、国民投票方式導入の憲法改正の動きを聞き、辞退は取り消す。7月の総選挙でAKPは再び大勝。その結果を受け8月、AKPのギュル再指名で議会での選挙が行われた。これに際し、ギュルは世俗主義体制の尊重を誓約する記者会見を開く。しかし、これを追うように8月末、国民投票も実施され、即日夜ギュルの大統領就任の宣誓式・祝賀式という運びとなった。国民投票を言い出したのはエルドアン首相だったが、議会での最初の強烈な拒否反応は国民による選出というオープンで冷静な手続きに移り変わった。この推移をもたらしたのは、ギョルの自制的で穏健な対処、出処進退の合理性、そして05年EU加盟交渉開始の実績だったと言える。

エルドアンが転換させた政治風土

共和国建国理念の逆転劇で本命のレジェブ・タイプ・エルドアン(1954~)について、いよいよ語るようになった。2007年大統領になったギュルを継ぎ、2014年それまで首相だったエルドアンが大統領となり、現在に至るのだが、すでにギュルとの関係で明らかなように、公正発展党AKPの中心人物はエルドアンなのだ。彼はエルバカンやギュルの到達点/また[これも前出の]ヌールジュの発展だったフェトフッラー・ギュレンのジェマート運動の巨大組織/を踏台に、もはやイスラーム主義は社会的適合を証明して存在や役割を認めさせるといった弱い働きかけの

段階ではないと自覚して、剛腕を振るい政治風土の全体的転換を推進するのである。

エルドアンはイスタンブルの〔ガラタ橋からタクシム広場に向かう上り坂の〕庶民街ベイオール地区育ちで、中下層市民の気質は熟知、たくましい商魂と抜け目なき駆引きの国際感覚も身につけて



いる。若くして国民救済党MSPの政治活動に参加、政治レトリックで私淑していたネジブ・ファズルの葬儀に引き続き軍のクーデタの威圧という挫折もなめたが、民政移管後の福祉党RPの活動ではめきめき頭角を現し党勢を伸ばして1994年イスタンブール市長に当選、2年後のエルバカン政権樹立に先駆ける。しかし同政権があえなく崩壊した年の暮、彼も公式の席でイスラーム賛美の詩を詠唱したのが宗教的憎悪を煽る行為とされて翌98年市長辞任に至り、99年4年半の実刑判決が下り(4カ月間収監)、憲法76条に基づき被選挙権を剥奪された。この間にアブドゥラー・ギュルと最初表向きは穏健保守の公正発展党AKPを結成、憲法76条の改正や議員補欠選挙もあって、2003年ギュルに代わって首相に就任した。エルドアンの首相在任は03年～14年8月〔後任はアフメト・ダウトオール、16年まで〕。〔ギュルの任期07～14年を継ぐ〕大統領としての在任は14年8月～現在。またAKP党首在任は01年8月～14年8月〔後任ダウトオール、ついでユルドゥルム〕／〔大統領に政党所属を認める憲法改正により〕17年5月復帰～現在／となる。

- ㊤ 21世紀トルコの内政の構造は急速に大きな変化を遂げつつある。そこでもっとも重要な特徴点は、ケマル・アタチュルクが確立した世俗主義の体制が、政治化する民衆に押されて、それへの異議申し立てや見直しや反省が拡がり、ことに冷戦期に米政がテコ入れした軍を擁するその権威主義支配が揺らいでいることだ。イスラーム主義の運動が軍の圧力やクーデタによって繰り返し潰されたのと対照的な力関係の変化が観察される。2012年になって、幾度も暗殺の策謀を生き延びたトルグット・オザル大統領の1993年の死が軍部の仕組んだ毒殺だった事実が、19年余を経た遺体調査で毒物が検出されたことにより証明された。83年の民政移管にあたり中道右派を結集した祖国党ANAPの統治〔有能かつ良識的テクノクラートでイスラームの伝統を評価することにも目配りを怠らなかつた知識人政治家、オザル(クルド系、1927～93)の首相(83～89年)・大統領(89～93年)〕の時期は、福祉党RPも活動を拡げることができ、学校では「宗教文化」の教科が

新設され、女子のスカーフ着用禁止も緩められた。オザル殺害は黒幕の魔手をかいま見せる。

2007年には爆弾テロ未遂事件を機に、将校たちの地下組織「エルゲネコン」が摘発されたことが伝えられ、ジャーナリストら関係する民間人も逮捕されていた。2016年7月15日には、エルドアン大統領が休暇でトルコ南西部のエーゲ海に面する保養地にいる時点で、公然たる本格的軍事クーデタが発生する。アンカラやイスタンブルをはじめ各地で交通の要衝やTV局などを押さえ、大統領のホテルも襲撃・爆破した。エルドアンは辛くも脱出し、近傍〔車で75分程〕の空港からビジネスジェット機でイスタンブルに急行する際、スマホTV電話でCNNトルコに登場、国民にクーデタは失敗だと予告し、街頭・広場・空港に出て軍の動きを阻止せよと訴えた。これに多数の市民が応じたことが注目される。2011年以来の世界的な〈市民決起〉の意義に半解であれ感応する指導者のカンだったのだろう。反乱側戦闘機の追尾をかわし16日暁間イスタンブルのアタチュルク空港に到着した大統領は、クーデタの首謀者を米国ペンシルヴァニア州セイラズバーグからジェマート運動を操るフェトフラー・ギュレンだと名指し、非難した。軍は二分し反乱勢力はなお攻撃を続けたが、16日昼までに鎮圧された。共和人民党はじめ野党もクーデタ非難の共同決議に名を連ねた。反乱分子追及がはじまり、7万7千人逮捕、16万人解職とも言われた。空軍司令官を筆頭に将官・提督163名(軍上層部の45%)、軍士官など約4万5千、警察幹部・裁判官・知事・上級官吏約2千7百、教師約1万5千が拘禁され、9月末から裁判が開始された。軍の政治介入頻発の歴史が、重大な転換点を迎えたのだ。

一見、イスラーム運動を抑圧してきた軍がその力を失い、エルドアンのポピュリズムの勝利のようだ。だが、その「勝利」は、ギュレン率いるイスラーム運動に責任をなすりつけ、その巨大組織を切り捨て潰すことによって、得られた。軍クーデタの真相は不明だが、2013年の政府の腐敗を批判する大衆運動あたりから、イスラーム運動内部で、AKPとジェマート運動との間の亀裂が生じていたのは確か。また、ギュレンの身柄引き渡し要求に事寄せ、対米関係操作に関わる面もないとは言えず、いずれにせよ、一概にイスラーム主義の勝利とは言えない。しかし、「テロ」性をギュレンのイスラーム運動に預けたところで、共和国のアタチュルクが樹立した政治原則という「錦の御旗」がすっかりほころびてしまったことも争えぬ事実で、権力者がどのようにお面をかぶり替えてみせても、深刻な体制危機の幕開けであることに変わりはない。

- ⑤ 共和国の対外関係＝外交あるいは国家戦略の面でも、21世紀になって目を惹く変化が起きている。それは、先に触れた2014年エルドアンが大統領になるとき、首相およびAKP党首の座に据えたダヴトオール(1959～)はイスタンブルのボアズィチ大学政治学博士で、同大学で教えていたギリシア人地政学者ディミトリ・キツイキス(1935～)[アテネ生れのギリシア正教徒、フランス留学中5月革命では極左の毛沢東主義者、中国滞在后オタワ大教授となりカナダ帰化〔ギリシア・仏・カナダのパスポート持つ〕、トルコ諸大学でも教えオザル大統領の親友で顧問、中国史・トルコ史研究から〈中間介在地域〉という文明モデルを考案]の影響を強く受けた。1990年からクアラルンプルのマレーシア国際イスラーム大学にて教え、95年帰国してイスタンブルのベイケント大学開設を支援、国際関係学を同大学や軍関係の諸学校で教授したが、2002年ギュル首相に招かれて外交問題の首相顧問となり、それはエルドアン首相のもとでも引き継がれた。09年外務大臣に任命され、11年総選挙で大国民議会のAKP議員の資格を得る。その後は、14年党首並びに首相に就任することについては、すでに述べた。

ダウトオールは、その対外政策の考え方＝国際戦略は、アブドゥラー・ギュルの外交を受継ぎつつ、師のキツィキスの〈中間介在地域〉Intermediate Region 概念を政策に活かそうと模索する立場だったと言える。アルメニアとの歴史問題とクルド人処遇の現実問題とを解決し、あらゆる関係国との間で全方位的に、安全保障の不可分性／対話／経済相互依存／文化調和と相互尊重／に基づく〈問題ゼロ化政策〉No Problems Policy を目指し、イスラーム連帯を推進するとともにヨーロッパ連合加盟を実現、中国・インド・ブラジルなどとの協力を進めてトルコのグローバルな役割を強める、というものだった。彼が首相への外交問題顧問ついで外相だった時代には、こうした原則的立場が公正発展党AKPの外交政策のそれとして公式に表明されていた。AKPのトルコに対する新オスマン主義出現とかムスリム同胞団路線の汎イスラーム主義再来などといった批評に対しては、以上のような文明戦略の回答が用意されていたのである。確かに、実際の外交上の課題では、キプロス問題と対ギリシア関係／〔封鎖下ガザ支援の人権NGO船団を襲撃した〕イスラエルとの関係／〔ムスリム同胞団モルスィ政権を打倒した〕エジプトとの関係／のように、全面的にないし基本部分は打開のメドの立たぬ場合もあれば、核プログラム関連の制裁問題での対イラン関係やクリミア併合問題での対ロシア関係のように、独特のアプローチを構築する場合もある。いわゆるイスタンブール条約(女性に対する暴力及び家庭内暴力の防止・取締りに関する欧州審議会協定)の署名会議・批准・発効に向けたイニシヤティヴや、アヤソフィア博物館のマスジドへの変更要求に対する問題では〔ギリシア政府の宗教問題介入に警告しつつ〕あくまで国際法に基づく処理原則を確認していたことなども、上記の立場の展開例だった。

しかし、トルコがシリア内戦の国際化に避けがたく関与していく混迷の過程で、ダウトオール自身が責任を負うべき判断ミスもあるとはいえ、それよりも、大統領となるエルドアンは上記のようなAKPの国際戦略の原則を逸脱し解体する事態を目立たせはじめる。それは、ダウトオールにとって、首相とAKP党首との二つの責任を委ねられる段階と重なった。国際政治的な責任だけでなく党と内政の腐敗・弛緩に対処する責任を担うことが、憲法改正により執行権力を強めようとする大統領の権力集中の動きと両立し得ないことは必然だとして、彼はこの段階をわずか1年9カ月で終わらせ、2016年5月末に辞任するに至った。これまた、エルドアンがもたらした政治風土の転換がはらむ危機を暗示するものだ。

- ◎ 2016年7月のクーデタ禁圧に乗じた軍およびイスラーム運動の思いきった再編、また17年憲法改正は、大統領の強権を極度に拡大するが、経済・政治両面で行き詰まりも目立った。

雌伏3年余、ダウトオールは2019年12月、AKPに対決する未来党GP[Gelecek 未来]を結成した。これを追うように、AKPのかつて若手ホープだったアリ・ババジャン(1967～)[米国留学で鍛えた経済・金融専門家、2002年より大国民議会AKP議員、02～07ギュル首相のもと経済担当國務相、07～09エルドアン首相のもと外相(ダウトオールの前任者)、09～15エルドアン次いでダウトオール両首相のもと副首相]が少数者の権利、議会民主制復帰、言論表現の自由回復、司法・立法手続きの公正に力点を置く「民主主義と進歩」党DEVA[Demokrasi ve Atılım 民主主義と進歩]を、有力者を集め、2020年3月旗揚げする。イスラーム主義の風潮の遷移とそれにとまなうトルコ共和国の変貌とは、さらに激しく進展していくことになるだろう。

アヤソフィアのマスジド・ジャーミイ「立ち還り」は、この流動の只中で、エルドアンのある種の「開き直り」行動として引き起こされたものだ。少し前まで、エルドアンはアヤソフィア問題につい

ては慎重姿勢をとっていた。シリア内戦操作・シリア難民操作に発した道は、前後見境なく単発の大衆迎合的事件を打つ局面転換策の繰り返しに繋がり、アヤソフィア・ジャーミイ復活もこうして起きた。大統領の一存でそれが可能になったのは、確かに政治風土の転換あつてのことはあるが、この式で踏み込みだせば、アヤソフィアの次は[ポーランド共々、「家族」を崩壊から守ると称して、提唱国だったはずの]イスタンブル条約からの離脱だ、という話になってきている。

クーデタへの勝利という政治風土の転換が、政権党 AKP の危機を高め、イスラーム主義者を引き裂いて離反は進む。そうした「転換」の全体像を掴むことが大事だ。指導者が人気取りに血迷って、イスラーム的思考の基本的立場＝タウヒード(多即一)をわきまえぬ逸脱に踏み迷い、恣意と専断と強権によって自滅していく可能性を見とおすことが必要なのではないか。

ジャーミイ兼博物館としてのアヤソフィアが意味すること

アヤソフィアの地位変更への反応[まずは直後に限って]

アヤソフィアの地位を変更する場合は国際法上の考慮を払い検討を尽くすという、トルコ政府のかつての表明は棚上げされ、大統領令で決定された。ユネスコ(国連教育科学文化機関)は、即日、決定が1972年世界遺産協定に基づく事前の協議も通知も一切ないまま行われたことに対する遺憾の意と決定の実施によって生じる問題に関する警告とを発表した。

<https://en.unesco.org/news/unesco-statement-hagia-sophia-istanbul>

トルコ政府は、アヤソフィアはジャーミイ(金曜集団礼拝の礼拝所)となっても、従来通りそこを訪れるすべての人に開放され、参観することができるとしているので、事実上、ジャーミイは世界遺産として、従来どおり博物館の機能も兼ねることになるだろう。ただし、ジャーミイとなったことで、入場料は無料となるという観光客にとっては意外なプラス効果も生じた。他者の信心への尊重と敬意を持しエチケットを守るなら、非ムスリムがイスラームの集団礼拝を特別の場所で一定の距離で見学する機会を得ることも期待できるかもしれない。礼拝に参集する信者たちと言葉を交わしたり、心情を察したりする、単なる観光とは異次元の旅を味わうこともできよう。

だが、心配もないわけではない。マスジド転換の決定後たちまち、トルコとギリシアの海軍が不穏当に対峙したり、祝賀気分の続きでエルドアン大統領が芝居気たつぷり「黒海で大ガス田発見」を発表したりしたように、アヤソフィアは政治問題化される。「正教会の礼拝も」の要求は避けがたい。宗教儀礼の場が、国家間の抗争や隠微なテロを呼びさまさないとは限らない。

トルコ社会内部でも、ムスリム一人一人の考えは異なり多様だし、諸宗教を見わたせば万華鏡の趣となる。東京外国語大学には広く登録者向けの「tufsmedia 日本語で読む中東メディア」というサイトがあり、アヤソフィアのジャーミイ化後のトルコの新聞記事も紹介されていた。3例のURLを以下に挙げておく[原文、執筆者、掲載紙、掲載日、記者など、分かるようになっている]。

<http://www.el.tufs.ac.jp/prmeis/src/read.php?ID=49617> ここまで集まるとは！

<http://www.el.tufs.ac.jp/prmeis/src/read.php?ID=49655> 誰がアタチュルクを呪うのか

<http://www.el.tufs.ac.jp/prmeis/src/read.php?ID=49665> モスクについての嘘

紹介の対象とされた新聞の性格から、アタチュルクが定礎した共和国の世俗主義体制の揺らぎへの見方にウェイトがかかっている例示となったが、本当は[アヤソフィアの地位変更に踏み出した]イスラーム主義の現政権の危機にも眼を向けなくてはならない。

オルハン・パムクの読まれ方とアヤソフィア

オルハン・パムク(1952~)はイスタンブール生れのトルコ人作家、1982年から小説家として立ち、たちまち名を成し、米国コロンビア大学に3年間客員教授として迎えられた[2006年から再び教授としても]。作品は数多の賞を獲得したが、2006年ノーベル文学賞受賞。創作に通底するテーマないし関心として、トルコ社会のヨーロッパ化、そこでの東・西の出会い・交雑が注目され、日本でも訳書は多く、そのような読まれ方をしているように思われる。このたびアヤソフィアのジャーミイ化に対しパムクがいちはやく公然と批判の声を挙げたことが報じられた。そこで、彼の作品の幾つかを読み返してみてもはどうだろう。初めての方は、アヤソフィアを心に留めて。

『白い城』[原著1985]、宮下遼訳、藤原書店、2009。

『わたしの名は紅(あか)』[原著1998]、和久井路子訳、藤原書店、2004。

『雪』[原著2002]、和久井路子訳、藤原書店、2006。

『僕の違和感』上・下[原著2014]、宮下遼訳、早川書房、2016。

『赤い髪の女』[原著2016]、宮下遼訳、早川書房、2019。

私の提案の狙いは、彼の作品を読むとき、ヨーロッパとアジア／東と西／という単純な二分法を前提に、両者の関係性(衝突・交渉交雑・相互浸透)といった見方が付きまどってきた、そのような解釈がイスタンブールやアヤソフィアのイメージや理解にも通じていて、何となく身に付いてしまっている一体の先入観のようなものではないか、振り返ってみたい、ということである。二分法の思い込みを取り払い、徹底的に多元のネットワークへの視角を求めたいのだ。

〈中間介在地域〉の象徴としてのアヤソフィア

或る人ないし人々が実行した企ての動機や目論見が、別の人の眼にはまったく違って見えることがある。実行した当人が最初の目論見などと全然関係ない方角への発展に驚くのだって、よくあることだ。人為はそれを超えた道理や宇宙的連関のもとにあることを忘れてはならない。

アヤソフィアの地位変更の一方的決定は、国際的にも国内的にも既成秩序に対する「トルコ第一」主義の挑戦であり、ポピュリスト演じる権力誇示の一活劇だった。だが、ジャーミイ兼博物館という事実上の「着地点」が未来に向けてどんな意味をもつか考えるとき、トルコ社会に新たに拮がりつつあるグローバル世界感覚やトルコの国際的位置感覚に、注意を払わないわけにいかない。トルコ社会では、政治的立場は異なっても、誰もが変貌する世界の中でトルコには発言権があるといった自負を口にするようなところがある。欧米が覇権を握った時代に代わる新しい国際秩序が待望され、多元的文明の復興が唱えられている。

国民のそのような精神構造に理屈の裏付けを与えているのは、[AKPの理論家で首相・大統領にもなった末、エルドアンがAKPを見限った]あのアフメト・ダヴトオールだ。彼の代表作は、

- 1] *Alternative Paradigms: The Impact of Islamic and Western Weltanschauungs on Political Theory*, University Press of America, 1994. (新たな思考枠組：イスラーム及び西欧の世界観が政治理論に及ぼした影響)
- 2] *Civilizational Transformation and the Muslim World*, Kuala Lumpur: Mahir Publications, 1994. (文明の変貌とムスリム世界)
- 3] *Stratejik Derinlik: Türkiye'nin Uluslararası Konumu*, İstanbul: Küra Yayınları, 2001. (戦略的深度：トルコの国際的位置 [トルコ語])

もちろん大衆はこんな学術書を読むわけではないが、これからの文明また世界のあり方・秩序のために、オスマン帝国の伝統をもつトルコ社会が大きな役割を果たせるのだという議論は、広く知られている。

時間・空間の知覚のもと存在(いのち)・知識・価値(倫理)を統合する心性をもつ個々人の自己認識(ベン・イドラキ ben idraki)が文明の核ないし土台としてあり、それが法・文化・経済・政治と相互作用しながら都市・国家・世界秩序へと文明の規模を拡げていく過程で、個人やコミュニティの相互接触・ネットワーク形成が文明化にとって重要な意味をもつことが強調される。そのような文明化の推進力は〈中間介在地域〉[ダウトオール先生のキツィキスが考案した概念、ギリシア語ではエンディアメセ・ペリオヘ Ένδιάμεση Περιοχή]から出てくる。キツィキスは、世界史的にエーゲ海からインダス川までの地域を考えたりしたが、ダウトオールはトルコ人がこれから世界全体にとっての〈中間介在地域〉となることを構想した。外側では、それをトルコが「中心国」になると言ったように誤解した人もあるが、彼の考え方からすれば、世界中のあらゆる個人が・社会が・国が〈中間介在地域〉になろうとすることを期待する理論であるだろう。

わたしたちは、とかく、イスラーム教徒、ギリシア正教徒、トルコ国民、ハンガリー人、シリア難民、スンナ派、IS、などと人を団子に丸めて考えがちである。キツィキスは、イスタンブルを征服したオスマン軍団の兵士たちをイスラーム教徒(ムスリムたち)と概括するのは問題で、大枠はそうであっても、実態は[キリスト教やシーア派やチュルクの土着信仰などが混ざり合った]ベクタシ教団や[シーアのイスマイル派から分かれてキリスト教や多彩な土着信仰を合体した]アレヴィ派の人々だった点を重視する。個人のレヴェルで見れば、教会堂からマスジドへの転換などにこだわる必要はなかった。一人一人がアイデンティティ複合を生きる中東の社会では、わたしたちのモノサシは見直さなければならない。もともと敬虔なギリシア正教徒で、トルコ学・中国学に造詣深いデミトリ・キツィキスは、ビザンツ・オスマン両帝国の再受肉化としてのギリシア・トルコ連合国家の実現を志向しているようだ。わたしたちも、世界の新たな文明化における自分自身のベン・アドラキを探ることによって、ジャーミイ兼博物館の存在の意味を膨らませていきたいものである。

了